

令和6年度
中学生の主張
東京都大会
発表文集

中学生の主張東京都大会HP



※発表文集の電子版・
大会当日の動画を
公開しています。

 東京都



発表者の皆さん



奨励賞受賞者の皆さん

大会の様子



発表・審査の様子



発表者紹介



発表の様子②



発表の様子①



奨励賞受賞者の皆さん



審査員長講評・発表者の皆さん



特別審査員コメント



知事賞受賞者インタビュー

奨励賞 (氏名五十音順)

・ 本当の人とのつながり
東京都立大泉高等学校附属中学校 一年 岩松 明希 …… 14

・ 今よりも暮らしやすい自由な社会へ
東京都立立川国際中等教育学校 三年 金山 明日香 …… 15

・ 私は常に考える
あきる野市立東中学校 二年 川本 桜子 …… 16

・ ぶつかってみれば良い
東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年 澤田 一花 …… 17

・ 視野はグローバル 視点は足元
葛飾区立亀有中学校 二年 下田 真愛 …… 18

・ 「無自覚の壁」
明 晴 学 園 三年 高田 彩夏 …… 19

・ 私が思う多様性
立正大学付属立正中学校 一年 月村 柚花 …… 20

・ アレルギーに希望を見いだせたら
東京都立大泉高等学校附属中学校 一年 西 歌鈴 …… 21

・ 「ありのまま」
港区立高陵中学校 三年 藤森 ないる …… 22

・ だから世界は
葛飾区立亀有中学校 一年 鞠子 紗陽 …… 23

3 審査員長講評
十文字学園女子大学教授 富山 哲也 …… 24

4 最終審査員の感想 …… 25

5 令和六年度「中学生の主張東京都大会」概要 …… 27

6 【参考】令和六年度「中学生の主張東京都大会」募集概要 …… 28

7 応募状況 …… 29

8 過去の入賞者(直近三年間) …… 30

9 令和六年度「中学生の主張東京都大会」動画配信及び東京都公式ホームページについて …… 31

(※掲載作品については、誤字・脱字以外は原文のまま掲載しました。)

開会あいさつ

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長

村上 章

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長の村上でございます。令和六年度「中学生の主張東京都大会」の開会にあたり、ひとこと御挨拶申し上げます。

はじめに、本日発表される皆さんと、奨励賞に選ばれた皆さんに、心よりお祝い申し上げます。

この大会は、中学生が広い視野と柔軟な発想を持ち、自らの考えを論理的に伝える力を身に付けることを目的として、昭和五十四年から開催し、今回で四十六回目を迎えます。

今年度も、五、四六六名の中学生の皆さんから素晴らしい作品が届けられました。

作品には、社会的な課題をはじめ、日常で感じたことなど、様々な視点から、生徒自身の思いや考え、今後取り組んでいきたいことなどが生き生きとつづられており、本日はその中から、事前審査で選ばれた十名の皆さんに御発表いただきます。

発表者の皆さんお一人一人の、思いの溢れるすばらしいスピーチとなることを期待しています。

また、本日の発表を経て決定する、最優秀賞である知事賞受賞者は、国立青少年教育振興機構が主催する「少年の主張全国大会」の東京都代表として推薦されます。

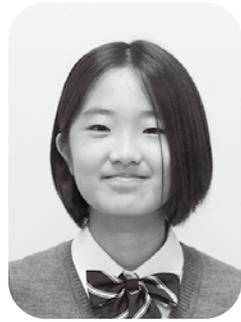
この大会を通して、中学生の皆さんには今後も様々なことに興味をもち、広い視野と柔軟な発想をもって自己や社会と向き合いながら、未来の東京、未来の世界を切り拓いていってほしいと願っています。

結びに、本大会の開催にあたり、審査員の皆さま、学校関係の方々をはじめ、多くの皆さまに多大な御支援をいただきましたことに感謝申し上げます、開会の挨拶とさせていただきます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。



知事賞



東京都立立川国際中等教育学校 三年

中川 絢心

みんなって誰ですか。

「みんなこうしたほうがいいって。」「みんなだってやってたもん。」

こう言うと、母はいつも私に「みんなって誰よ。」と言います。私はそれに対して何人かの友達の名前を挙げますが、「みんなじゃないじゃん」と言われるのがお決まりの流れになっています。自分で「みんな」という言葉を使っている時は、多数の人から浮くのが嫌なんだから別に全員じゃなくてもいいじゃんと思っていました。

小学校中学年のとき私は、自分の話し方の癖について友達に指摘されたことがあります。声が少し高いことと、滑舌が悪かったことをわざとやっているのだと思ったのだそうです。そのときに、言われたことの一つが「その話し方やめたほうがいいってみんな言ってたよ」です。わざとやっているつもりはなかったし、普段は笑顔で接してくれる友達に、話し方に違和感があると打ち明けられたことかなりショックを受けました。また、「みんな言っていた」と言われたことで、他のクラスメイトも内心同じように感じているのではないかと不安で、誰なのか分からない「みんな」の意見におびえていました。

以前、似たようなことがあったときも、私は「みんな」という言葉に強く不快感を覚えました。「みんな」という言葉の指す範囲はずいぶん大きく感じます。インターネットの普及に伴い、その範囲はさらに大きくなっています。自分がその「みんな」と違っているのだと知ると、どうしようもなく不安になります。でも、「みんなじゃないじゃん。」

「みんな」と言われると、大きな不快感とともに母の言葉を思い出します。実際に、話し方について指摘された時も、多くの友達は気にならないと伝えてくれました。

そこでふと疑問に思うことがあります。それは、どうして「みんな」という言葉を使ったがるのかということです。「みんな」というのは非常に便利な言葉です。たったひとりで自分に仲間がいるのだと相手に示せる。なんとなく一人じゃないと安心できる。「私はこう思う」ただ一言そう言えばいいのに、必死になって自分を「みんな」に合わせようとする。

人と違うのは確かに怖い。でも、自分と異なる人の意見が多いからといって自分が間違っているわけではないし、逆を言えば多くの人が同じ意見だからといってそれが正しいとも限りません。「みんなと違うから」と言って自分の意見を言わない。「みんなもやっていたから」と言って悪ふざけの輪に交じって暴言を吐く。自分で考えることをせずに周りについていって、それは本当にあなたのやりたいことですか。いやなことをいやと言わせてくれない「みんな」としてあなたは苦しくありませんか。

以前の私は、「みんな」の意見におびえ、周りから浮かないようにと必死でした。中学生になって、SNSやアイドルの話をする友達に囲まれて、知っていることがあたりまえという空気が苦しく感じることもありました。それでも、やっぱり私はこれが好き、と勇気を出して口にしてみようと思います。すると、完全には分かり合うことができなくても、自分の思いを素直に話せるようになって心がスッと軽くなったように感じました。

いつだって大切なのは自分がどう思うか、そして何を信じるかです。母もずっと、周りがどう、ではなく私自身の意見が聞きたかったのではないのでしょうか。インターネットが普及し、多くの意見に囲まれる時代に生きているからこそ恐れずに自分という存在を大切にしてほしい。不安になったら思い出してほしい。「みんな」って誰ですか。



東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

鈴木 葵

今できることは、今やろう。

別れ。この言葉を聞いて、あなたは何を思い浮かべるだろうか。

「また明日」という友人との別れ。「さようなら」という恋人との別れ。引越しによるしよしの別れ。誰かが亡くなった時の永遠の別れ。別れを人生の節目として捉える人は多いだろう。大きな転換点であるからだ。しかし私は、別れとは、一分一秒、一瞬一瞬の間にどんな人にも繰り返す訪れるものだと考える。

私は引越しの多い家庭に生まれた。周囲には同じような家庭が多かったこともあり、出会いと別れが日常の中に自然に溶け込んでいた。そのためか、私は別れに際して強く「悲しい」と思ったことがなかった。感覚がマヒしていたのだと思う。いつも「いつかまた、別れた友人とも会えるだろう」と、まるで他人事のように、どこか突き放して考えていたのだ。

しかし、小学五年生のころに経験した転校で考えが変わった。当時、両親から引越すことを告げられた私は、「また引越しをするのか」とどこか冷めた気持ちでいた。「悲しい」と強く思うことはやはりなかった。別れ際、仲良くしていた友人が私の隣で大泣きしていた。私は、「大丈夫だよ、また会えるよ」と優しく彼女を慰めるように言った。すると彼女は、「大丈夫じゃないよ、だっていつ会えるかわからないし、会えるのはきつと私たちがずっと大きくなった後だよ」と言ったのだ。

私は彼女の言葉に強い衝撃を受けた。今まで次に会うのがいつになるのか、その時の私たちは今とどのように変わっているのかなど考えたこともなかった

からだ。「大丈夫、どうせまたすぐに会える」という軽々しい気持ちは、彼女の言葉によって吹き飛んでしまった。そして同時に、激しく後悔した。友人たちに対して、言いたかったけれど言うのを先延ばしにしていた、伝えきれなかった言葉がたくさんあることに気づいたからだ。

私たち人間は、それぞれが経験を重ねるたびに考え方が変わっていく。今の私も今の彼女も、この瞬間にしか存在しない。後から気持ちを伝えようとしても間に合わないのだ。次に会うのが遠い未来であればあるほど、私たちの変化は大きいものになっていく。再会したとき、前のように楽しくおしゃべりできないかもしれない。なぜこの人と仲良くできていたのだろうとさえ思うかもしれない。人の実感や気持ちは日々刻々と変化する。だからこそ彼女は泣いたのだろう。

私たちは大きな別れに目を向けがちだが、実は一分一秒、一瞬一瞬、小さな変化、つまり小さな別れを経験している。そう考えるならば、私は、今できることを精一杯やりたい。

まずは、興味を持ったことはすぐにやろう。やりたいことが見つかったとしても、すぐにやらなければ私たちの気持ちは変化し、興味は別のところへ行く。それを繰り返すと、結局何もしないまま人生を終えることになる。いくら後悔しても、その時にはもう手遅れとなっているかもしれない。やりたいと思ったらすぐにやってみることが大切だ。

そして、感謝の気持ちはすぐに伝えよう。私は転校するとき、友人へ伝えられなかった無数の言葉があったことに気づいた。遊びに誘ってくれたこと。悩みを聞いてくれたこと。委員会活動で忙しい時に手伝ってくれたこと。感謝の気持ちは伝えたいのに、どこか気恥ずかしく、自分の思いをしつかり伝えきれていなかったことに今更ながら気づいたので。今からでも遅くない。普段から自分の気持ちを「ありがとう」という言葉にのせて、相手に直接伝えることが必要だ。今言うべきことは、その時に言うのが一番良い。時が経ってから言うても意味はない。

刻一刻と出会いと別れを繰り返す、変化していく私たちには、「今」を生きることでしかない。

だからこそ、今できることは、今やろう。晴れ晴れとした、悔いのない別れを迎えるために、一瞬一瞬を大切にしよう。



江戸川区立春江中学校 三年

村松 美来

生きること

日本国内で、年間二万人以上の方が自殺で命を落としています。あなたは一度でも自ら命を断とうと考えたことはありませんか。私は一度だけあります。

それは小学校五年生のときです。新体操の選手になるのが夢だった私は毎日何時間も練習していました。体力はそれなりに自信があった私ですが、少しのことで息が切れ、階段を登るのにも一苦労でした。かなりハードな生活だったので疲れているのかと思っていましたが、明らかに何かが違うと感じ、その様子を見ていた母がすぐ病院に連れて行ってくれました。血液検査をし、結果を見た医師は、「ここでは対応できない、紹介状を書くからすぐに大きい病院に向かうように。」と言いました。大病院に着き、たくさん検査をしました。

そして先生から重い病にかかっていることを告げられたのです。思い描いていた夢が音を立てて崩れ落ちました。先生はこれから始まる治療について詳しく説明してくれます。

入院での治療は一年。たくさん強い薬を使う事、それによる副作用が辛い事、容姿も変わってしまう事など包み隠さず話し、最後に必ず治すから一緒に頑張ろうと言ってくれました。

私は「あー。なんかこういうのドラマで見たなあ。」とか自分のことなのに、まるで他人事のように感じていたのを覚えています。

それからすぐに治療が始まりました。ビニールに囲まれたベット上の無菌室。沢山の線に繋がれ、何種類もの薬が体中を流れます。

治療は想像を絶するほど過酷でした。副作用が辛く食事を摂ることもできません。免疫がないのでちよっとした菌で高熱が続きます。どんどん体力がなくな

り自分が自分でなくなっていくのを感じました。コロナの影響で家族の面会もなく孤独の中、治療に耐える日々。一日が途方もなく長く感じるのです。

そしてある日私の心と体は限界を迎えました。

「無理。もう治療をやめて家に帰りたい。」泣いて母に訴えました。治療をやめるイコール死です。もう薬になりたい。自ら命を断とうと考えてしまいました。それでも、私がもう一度治療を頑張ろうと思えたのは、競泳女子のエースとしてオリンピックで活躍する水泳選手が、白血病の闘病中、自分に言い聞かせていたという、

「辛いのは今だけ。大丈夫必ず治る。」という言葉でした。

先の見えない暗闇にいるようだった私に光が差し込みました。辛いのは永遠じゃない今だけということに気づいた時、また治療に向き合えました。退院したら何をしたいか沢山ノートに書き、つらい時こそ楽しいことを考え一年半という長い入院生活乗り越えたのです。

「生」と「死」が間近にある小児病棟では小さな子供たちが病気に打ち勝つため一日一日を必死に生きています。そんな中、ニュースで流れる有名人の自殺報道。健康な身体があつてたくさん可能性がある人が自ら死を選ぶ。生きたくても生きられない人がいるのに。いつそのことその健康な身体を交換して欲しいとさえ思いました。

この先、もしみなさんが人生に絶望を感じ逃げ出したくなった時、思い出して欲しいです。辛いのは今だけ。永遠ではない事。笑って過ごせる日が必ず来ると信じてください。誰かが生きたかった明日を私たちは一生懸命生きていくのです。

私は、病気になるって気づいたことがあります。それは、沢山の人の優しさです。入院中に届いたクラスメイトからの手紙、ビデオレターに千羽鶴。応援してくれる皆の気持ち、一人じゃないんだ。頑張ろう、と私の気持ちを奮い立たせました。そしてあの場所にまた戻りたい。そう思わせてくれました。

退院して学校に行けるようになった時も不安だった私をクラスメイトが温かく迎え入れてくれ、足が不自由で困っていた時に差し伸べてくれた手が本当に嬉しかったです。

そして今、私は幸せです。

朝起きて家族におはようと言える事。顔を合わせて食事ができること。学校に行けること。友達と過ごすたわいもない時間。

あたりまえの日常が幸せに感じるのはです。こんなにも身近に幸せがあふれている事に気づきました。治療を諦めずに生きて本当に良かったと心から思います。つながった命、大切に生きていきたいです。

優良賞



普連土学園中学校 三年

岡田悦子

国際親善委員会を通して見えた私

国際親善委員会、と聞いて、みなさんはどのような活動が思い浮かびますか。私が学校で所属している国際親善委員会では、学園祭において、支援先の発展途上国の人たちが作ったカバンやクリスマスカード、コーヒーやカレースパイスセットなどの物品を販売することでフェアトレードを広げる活動を行っています。化学繊維ではなく麻を使った素朴な感じのカバンを持つと優しく落ち着いた気持ちになるし、普段家での料理では使わないような種類のスパイスセットを使うことで異国の味を楽しむことができ、現地の文化に触れられるような気がします。私は今年委員長になり、商品が売れるよう、ポップアートの見せ方を工夫するなどして委員会活動に積極的に参加していく中で、より活動内容に興味を持つようになりました。他にも、スリランカにいる里子たちが自立できるよう、里親として献金したり、献金先であるバングラデシュにいる子供たちと手紙を通してやり取りをしたり、ネパールやバングラデシュの子供たちの様子を講演してもらっています。

活動の中で、私はとても小さな子供が働かされていることを知りました。例えば、あるバングラデシュの女の子は五歳から家事使用人として他人の家で働かされており、教育も受けられていないため、働いていることが普通ではないということも知りません。また、負の連鎖が続くことで、その女の子の子ども、またその子ども、一生涯使用人として働くこととなります。当然、本来自分が持っているはずの可能性を見つけないこともできません。みなさんは、このよ

うなことが世界各地で実際に起こっていることを知っていましたか。

児童労働をしている里子たちのことを考えていたとき、以前父と交わした会話をふと思い出しハツとしました。当時私が、夏休みに遊ぶためのお金がほしいと思いい、「中学生でできるアルバイト何かないかな。」と何気なくつぶやいたところ、父は「今は自分が働くことよりも社会のことを広く知るために勉強したらどう？」と私に言いました。そのときはアルバイト案を却下されて残念に思いましたが、いま考えてみると、父の言ったことが理解できるような気がします。軽い気持ちで私が発したアルバイトと、選ぶ余地なくやらされている児童労働とは、あまりにも言葉の重みが違ったのではないかと気づきました。私が当たり前だと思っている、学校で教育を受ける権利や自分の将来について選ぶ権利などは、他の国では全く当たり前でなく、自分にはこのような権利が保障されているということに感謝しなければならぬと痛感しました。私は、児童労働の問題を改善するためには、まずは多くのことを学び知ることが大切だと思いました。

私は、将来外交に関わる仕事に就きたいと漠然と思っていました。しかし、委員会の活動を通して、世界と日本における学校や子供たちの状況の違いに気づかされ、やりたい仕事は明確になってきました。それは、自分の権利に気づいていない子供たちや子供たちに伝えることのできない親への教育に携わることです。そして、発展途上国と日本をつないで、日本のような恵まれた教育環境を世界に普及できたらいいと考えています。

ただ、私はまだまだ世界の子供たちの様子をよく知りません。また、自分ができる画期的なアイデアも思い浮かびません。そこで、今後は様々な国際ボランティア活動に参加するとともに、いつかは発展途上国の子供たちがいる地域を実際に訪れ、教育の仕組みを体感したいです。今はまだ中学生ですが、高校生からできる活動にも積極的に参加し、自分の見識を広げ、将来自分がどのような形で社会に貢献できるか考えるための経験をたくさん積んでいくつもりです。

優良賞



立川市立立川第一中学校 三年

坂本 絢菜

地域との繋がり

私は、地域との繋がりの大切さを主張したい。

私は幼稚園の頃、立川市曙町に引っ越してきて、自治会と子ども会に入会した。自治会では、夏に三日間の祭礼があり、山車太鼓で町内を巡回し、子ども神輿を担ぐ。最終日には曙町祭礼パレードに参加する。公会堂前の公園には、子ども会による、射的、かき氷、スパーボールすくいなどの屋台が並び、盆踊りや抽選会がある。毎年楽しみにしている夏の一大イベントだ。小学校高学年になると、屋台を運営する立場になった。小さい子も来るため、ゲームの難易度や安全性、どうやったら楽しんでもらえるかなど考えることが色々あると知った。買い出しに行ったり、会場を作ったり、どれだけの時間がかかっているか、実際にやって気づいた。

小学校の登校時には、毎日、児童に万が一のことがないように見守ってくれている方々がいる。秋には落ち葉の掃除がされる。公園にはきれいな花が植えられている。運動会、防災訓練、三世代交流のファミリーフェスティバルなど、一年を通じて様々なイベントが開催される。当たり前のことではない。たくさん地域の方々に支えられているということを多くの人に知ってほしい。

私が小学校一年生の時のこと。一人で学校から家に帰っていた。横断歩道の真ん中で転んでしまい、泣いて立ち止まってしまった。その時、地域の方が気づいてくれ、安全な所まで移動させ手当てをしてくれた。私の顔を知っていたようで、人づてに母に連絡までしてくれた。もし、気づいてもらえなかったら

どうなっていたらどうか。本当に感謝してもしきれない。

昨今、少子高齢化による子どもの減少が問題になっている。加えて親の共働きや、塾や習い事などで子ども自身にも時間がなくなっている。地域の自治会や子ども会に入会する家庭が減ってきている。昨年、曙町では祭礼パレードに向けて募集をかけたが、子どもが集まらず、子ども神輿ができなくなってしまった。こうした現状もあり、今年は少し形を変えて、あけぼの夏まつりの中で、多くの子ども達に子ども神輿を体験してもらうことができた。今年のあけぼの夏まつりの来場者数が一万人を超えたと聞き、驚きと同時にその一員になれたことを誇らしく感じた。

日本は特に自然災害が多い。いつなにが起きてもおかしくない。もし大地震が起きた時、子どもの側に親がいないという状況もあるだろう。その場合、子どもを見てもらう、情報交換、炊き出しなど、助け合えるのは地域の方々だ。地域との繋がりを持つことで、得られることはそれだけではない。地域の文化や伝統を知る機会があり、異なる世代との交流ができる。学校生活だけでは体験できないことがたくさんある。

私は今、曙町のジュニアリーダーとして、地域との繋がりを持っている。ジュニアリーダーには、子どもと大人を繋ぐ役割がある。企画を考えたり、会議をしたり、様々な地域行事の手伝いをしている。それらを通じて、たくさんの方々と繋がることができ、とても充実した日々を送っている。

地域との繋がりを持つことは、私を大きく成長させてくれる。子どもはもちろんのこと、大人の方々にも地域との繋がりを持つことについて、今一度考えてみてほしい。私は曙町に支えられてここまで育ってきた。その恩返しも含めて、大好きな曙町に貢献できるように努力を続けていきたいと思う。



立川市立立川第二中学校 三年

田島侑弥

夏休みの宿題に作文が三つ出た中学生の主張

今年も夏休みの宿題に作文がでた、しかも三つだ。

去年の中学生の主張作文で、僕は「作文が苦手な人間もいるのだから宿題に出さないでほしい」と主張した筈なのだけれど、どうやら僕の主張が届かなかった。もしくは主張が届いた結果、学校の宿題担当者を怒らせた。

作文が得意な人はいいと思う。文章を書くのが好きな人もいいと思う。周りに主張したくてたまらない生徒にはまさに最高の宿題だと思う。でも、作文が苦手な、どのくらい苦手かというところ、一つの作文、原稿用紙約三枚を、一週間かけて書き終わるかどうかだから、それが三つとなると、長いと思っていた夏休みのうち三週間がもう作文で終わってしまう。しかも、宿題のメインがそれだけなわけではなく、他の教科全てから宿題が出ている。夏休みが二ヶ月あればギリいけるかもしれないが、実際は一ヶ月くらいしかないので計算上全部こなすのは不可能だ。地獄かよ、と思う。思うというか、家の中で何度も声に出した。疲れた、もう嫌だ、地獄か、そういうと親は「まあまあ、一時間あれば作文一つできるでしょ。苦手でも、一日あればできるでしょ。それが三つなんだから、三日で終わるじゃない」と答えた。国語が得意だったらしい親は、あっち側の人間だ。僕が一時間で解ける理科の問題は一生解けないくせに、できて当然でしようみたいな顔をする。話が通じない。この課題を出した人もそっち側の人間かもしれない。

ただ、文句を言っただけでは、小学生の主張作文になってしまう。僕は中

学生なのだから、もつと話を前に進めたい。すなわち、ではどうすれば良いのか、自分なりの提案をしたい。

さっき触れた通り、僕は他の人が簡単にできるものが十倍以上苦手だったり、逆に、他の人が苦手な教科を数倍早く解けたりする。それは多分他のクラスメイトも皆そうだろう。僕の作文と同じように、別の教科が何週間かけても終わらず、楽しい筈の夏休みを楽しめなかったり、地獄かとか言ってるのかもしれない。

それなら、夏休みの宿題を選択式にしてはどうだろう。勿論、「これだけは夏休み中に復習してくれないと困る」というような必須科目はあってもいいので、それ以外は選択式にして、それぞれの生徒が好きな項目を選べるようにしたらどうだろうか。

今までやれと言われたものだけをやっていた結果、相当僕の判断力は鈍ってきているし、それは『高校はどこに行きたいのか』と親に聞かれて「知らない。わからない。どうでもいい」と答えて呆れられたほどだ。選択をする場面がない。だから、選択慣れするためにも良いと思う。

何より、これなら得意不得意が全員バラバラでも、大体同じように夏休みを楽しんで、大体同じように地獄を見ることが出来る。最高ではないか。

今年是不平や問題点を指摘するだけにせず、解決案まで書いてみた。来年は少しでも改善されて、より充実した夏休みが送れば良いと思う。

優良賞



東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

角田 知佳

海外移住で得た力

私の右耳から英語が聞こえ、私の左耳からは日本語が聞こえる。私は英語を聞き取り、日本語に変換していた。二つの言語が聞こえることが日常となっていた。

私は純日本人だ。日本で生まれ日本で育った。しかし、小学二年生の春、父の転勤で私の家族は二年間イギリスに移住することになった。英語圏の国に行くことは初めてで、外国語に触れることさえ初めてであった私は、スラスラ外国人と話す父に憧れ、必死に英語の勉強を頑張った。あの日の父のかっこいい背中を今でも鮮明に覚えている。

イギリスには夏休みの間、一週間のサマーキャンプに行くという習慣がある。その年の夏、私は姉と共にサマーキャンプに参加することになった。参加者は外国人ばかりであり、周囲が英語で会話する中、私は何も話すことができず姉の存在だけを頼りにしていた。姉も決して英語をスラスラと話せるわけではなかった。しかし、相手が聞き取れないと何回も発音したり、ジェスチャーを交えたりしながら試行錯誤して伝えようとする姿が、凄く頼もしく思えた。一日に二回あるスナックタイムでは、とても甘いクッキーとジュースがでた。こんなにも甘いクッキーを毎日食べるのかという驚きと、スナックタイムが二回もあるのかという文化の違いにひどく興味をそられたのを覚えている。

翌年もまた私はサマーキャンプに参加した。私はガラスで工作するコースに、姉は料理コースに参加を希望したため私は一人で参加することになった。不安

な気持ちも大きかったが、姉に頼ってばかりだった前年の自分とは違う自分になりたかった。工作コースの生徒は、案の定、英語を流暢に話す人ばかりだった。しかし、日本人は私以外にもう一人、男の子とその母親がいた。私が黙々と作業を進めていると、突然、先生が私に話しかけてきたのだ。アドバイスの内容をその日本人親子に伝えてほしいとのことだった。通訳を頼まれるとは思ってもしなかったもので、私は驚きと嬉しさが隠せなかった。先生からのアドバイスは意外にも自分の知っている単語が多く、自然と理解することができた。そして、英語で聞き取った内容を自分なりに精一杯翻訳し伝えると、その親子に「本当にありがとう。」と、とても感謝された。一年前、あんなにも英語が話せなかった私。姉がいなくて何もできなかった私。外国人と会話する父に憧れてその背中を追ってきた自分の姿を考えると通訳を頼まれ、その仕事を務めあげられたことは本当に夢のようだった。どんなことでも一人で挑戦してみること、人と人の間に立つてコミュニケーションをとり、何かを伝えようとすることの楽しさを学んだ。

小学五年生の春、日本への帰国が決まり、再び日本で暮らし始め、生活の中で日本語以外の言語に触れる機会は格段に少なくなっていく。中学校では、授業を通して英語に触れてはいるが、日常生活では英語を使う場面はほとんどない。何も不自由がない生活ではあるが、苦労しながらも成長していったイギリス生活を思い返すと少し恋しく感じる。

友人に実は帰国子女だということを話すと、決まって「英語を話せるんですよ？」といわれる。実際のところ少しは英語の感覚はあるが日本に帰国してきてかなり時間がたっているもので、英語の力はずいぶん落ちていると感じる。でも確実に私の中に残っているものもある。それは異文化社会の中で自分の限界を作らず挑戦していく力だ。外国という異世界の中で初めは周りに頼っているばかりだったのが、自分なりに努力して少しでも頼られる存在に成長したと自負している。

このような貴重な体験で得た力は、決して無駄にはしたくない。今後は今まで以上に学業にも部活動にも励み、どんな時も自分の限界を作らず、新しいことにも挑戦していきたい。

優良賞



東京都立大泉高等学校附属中学校 一年

長島 奈央

誰かへ私ができること

皆さんは、小学生のときに使っていたランドセルをどうしましたか。私の友達に聞くと記念にとっておくとかどうしたらよいか迷ってとりあえず押し入れにしまったという人がほとんどです。中には、もう処分してしまったという人もいました。

私のランドセルはというと、今から海を渡りアフガニスタンの子どもたちにプレゼントされる予定です。それは、子ども新聞を読んで見つけたある企業の活動で、使い終わったランドセルを海外に送り、第二の活躍の場を与えようというものに応募したからです。私は気になってホームページを見てみました。アフガニスタンでは、長引く紛争の影響で子どもたちの使う学用品が非常に不足しているそうです。この企業は、現地のNGOと協力して、毎年ランドセルを子どもたちに届け、学ぶ喜びを知るきっかけにして欲しいとの思いがあるそうです。

私が大切にしてきた、光沢のあるむらさき色のランドセル。お気に入りでした。きずも少なく、捨てるなんてことは絶対にできないけれどこのまま置いていても古くなるだけ。どうしようかと悩んでいたときにこの活動に出会い「これだ」と思い、応募を決めました。私は今までの感謝の気持ちをこめてランドセルをきれいにふきました。英語で「あなたの夢が叶いますように」とメッセージを書き、まだ使っていないノートと一緒にランドセルの中に入れました。ランドセルは希望に満ちて光りかがやいて見えました。私は記念に写真をとって

ランドセルを送り出しました。すがすがしい気分でした。

私のランドセルはコンテナ船に積まれ、シンガポールを経由してパキスタンのカラチ港へ向かいます。そこから陸路でアフガニスタンのジャララバードまで合計一万二千五百キロ以上の道のりを、様々な人の手を借りながら運ばれます。途中には難所も多いそうです。私が生まれる十年くらい前までアフガニスタンには内戦があつて、多くの地雷がうめられていたり、トラックの積み荷が強奪されたりしていました。女子は教育を受けることすら許されなかったそうです。

ランドセルを送る二か月前、私は隣国パキスタン出身のマララ・ユスフザイさんの手記を読みました。マララさんは女子も男子と平等に教育を受けるべきだと言い世界を変えました。私たちのランドセルもまた、男女平等に配られていることで、女子の教育に対する親の意識を変え、学校に行ける女子が増えたそうです。秋に新たにランドセルを受けとる子どもたちが幸せになつてくれたらいいなと遠くはなれた日本から応援したいと思います。

これをきっかけに、私は多くのことを知り、考えました。私にできることは限られています。これまでに送られた延べ十五万個のランドセルはたくさんの人に大きな影響を与えたと言えるのではないのでしょうか。私たちは世界にもっと目を向け、もつともつと関心を高める必要があると思います。まずは知ることです。そして、小さくても何かを始めてみるのが誰かの笑顔につながると私は思うのです。

優良賞



東京都立大泉高等学校附属中学校 二年

物井優希

ゴルフボールと砂

みなさんは優先順位を考えて生きていますか。

ある日いつものようにユーチューブを見てみると、外国の大学の授業の映像が流れてきました。授業では教授が瓶にゴルフボールを入れ、この瓶は満杯かどうかを聞きます。生徒たちがうなずくと、今度は小石を入れ、もう一度満杯かどうかを聞きます。生徒たちはうなずきましたが、教授はまた次のものを出してきました。砂です。小石の隙間に砂を入れ、さらにビールを注ぎ入れて、これで満杯になったと生徒に伝えます。教授は「さて、この瓶があなたの人生を表していることを認識してほしい。ゴルフボールは大切なもの、家族、友人、健康、情熱。小石はその他の大切なもの、車、仕事、家。そして砂はそれ以外のもの、小さなものだ。砂を先に入れてしまうと、ゴルフボールや小石を入れるスペースがなくなってしまう。人生も同じだ。あなたの幸せにとって重要なことに注意を払おう。優先順位を決めなさい。それ以外はただの砂なのだから。」といました。生徒がビールの意味を聞くと、「どんなに忙しくても、友人とビールを飲む余裕はある。」とジョークを言い動画は終了しました。

この動画を見て私は今の生活を見直してみました。家に帰ってきたらスマホで遊び、夕飯の時でさえスマホで調べものしながら食べ、寝るまでの時間をスマホで過ごしていることに気が付きました。小学校時代は、母のことが大好きで家に帰ったら手を洗うことも忘れて抱き着き、今日あった学校での出来事を話していたのに：国語で漢字を習ったこと、算数で隣の席の男の子と計算プ

リントでどっちが早く解くことができるか勝負し、負けて悔しかったこと。どんな話も母が笑って聞いてくれることがとても嬉しかったことを、なぜ忘れていたのか。いつも支えてくれ、寄り添ってくれた母にまだ何も返すことができないと実感することができました。

今では、小学校のころとは少し違うけれど、学校で学んだことや友達との印象的だった会話を母に伝えることができている。私が知らないうちに母が挑戦していた写真を一緒に撮りに行ったり、二人とも見たことがなかったハリイポッターの映画を数週間かけて一緒に見たり、母と「楽しいね」と笑いあうことができるようになりました。動画を見たことで、私にとって本当に重要なことに使う時間を得ることができたのです。

みなさんはこれまでの私のようになっていないませんか。スマホだけでなくサブスクでの動画視聴や、ゲームによって時間をつぶすことができるようになった現代社会で、本当に重要なことに時間を割くことができなくなっていますか。今はこの一瞬しか過ごすことができないのです。もう戻ることはできないのだと、人と笑って過ごす時間を、何かに一生懸命に取り組める今を大切にできていますか。

自分で優先順位をつけ充実した人生をつくっていける人こそが、一番幸せで楽しい人生を歩んでいくことができるのだと私は思います。自分の「ゴルフボール」を見つけることから始めてもいいです。「砂」に時間を費やす余裕はありません。自分が時間を使っているのが「ゴルフボール」なのか「砂」なのか見直し、優先順位を考え生活して幸せな今を見つけて欲しいと思います。



立正大学付属立正中学校 二年

安田みと

私たちの明日。

二〇二四年元旦。日本中が新しい一年の始まりをお祝いしていた日、夕方頃に揺れを感じました。テレビをつけて目に飛び込んできたのは衝撃的なニュース。石川県で震度七。大きな被害が起きているであろうことは一目で分かりました。新年のバラエティや歌番組は地震特番に切り替わり、お祝いムードが一転、辛く悲しい気持ちに包まれたことを今でもハッキリ覚えています。

その日の夜に、父が私に話してくれました。一九九五年一月十七日の阪神淡路大震災で体験したことを。当時父は二十歳。成人式から二日後のことでした。早朝に激しい揺れで目を覚ますと、家具は倒れ、スキーブーツが壁に突き刺さっていたそうです。訳が分からないまま外に出ると、建物は崩れ、あちこちで火の手が上がっていました。多くの人々の命を一瞬にして奪ったこの地震。そして、父の親友もマンションの倒壊に巻き込まれ、遺体で見つかったのです。

「どれほど泣いたか思い出せないほど辛かった。」

と語る父の目には涙が浮かんでいるように思えました。

実は私の父はお笑い芸人をしています。

五十歳を迎えた今も体を張る仕事が多いです。アメリカ大陸を縦断したり、百キロマラソンを完走したり、常に全力すぎるくらい全力で駆け抜けています。娘としては心配になることもありますが、その全力さの背景には天国の親友から受け取った思いがあったのです。

「お前おもしろいから芸人になれよ！」

と背中を押してくれたのが彼でした。二十歳で死んでしまうことを思えば、辛くても苦しくても生きていければ何でも出来る！それが父の原動力になっていたのだと知りました。

正直に言うと、父がお笑い芸人であると周りに知られるのが恥ずかしいと思っていた部分もありました。そんな私の気持ちを察して父は中学校の入学式を欠席しました。本当は来たかったはずなのに、

「みとがバカにされたらかわいそうだから。」

と自ら決断したと母から聞いて、申し訳なく思ったのと同時に少しホッとした自分もいたような気がします。

でも、今回何について書こうかと考えたときに真っ先に浮かんだのが父のエピソードでした。悲しみも背負いながら挑戦し続けている姿を今は尊敬しているからです。人を笑わせることが大好きで、手を抜くなんて辞書にない父の背中から、生きる〴〵ということの意味、ありがたさを教えてもらいました。

最近ニュースで小中学生の自殺者数が大きく増加していると知りました。コロナ禍の影響でリアルコミュニケーションを取るのが下手になったことも一因ではないかと言われているそうです。私たちの年齢は、小学校高学年の大切な時期にコロナで休校が続きました。修学旅行も運動会も、参観日さえ中止になりました。その影響は決して小さくはないと思います。

私自身、中学校に入学してからそれまでとは環境がガラッと変わり、慣れない生活に心も体もすぐにはついていけません。二年生になった今もしんどいと感じる時もあります。そんな日はただなんとなく、

「あーあ、明日が来てほしくないなあ。」

なんて思ったりもします。もしかしたら皆さんの中にも、私と同じように感じたことがある人もいるかもしれません。でも、それは明日が当たり前に来るからこその言葉。どれだけ強く望んでも、突然明日を奪われた人が多くいることを忘れないでください。

これからも辛いこと、苦しいことはあると思いますが、生きていければ幸せも必ず待っています。父の背中を追いかけて、私も一日一日を大切に過ごしていきたいです。

東京都立大泉高等学校附属中学校 一年

岩松明希

本当の人のつながり

「人とのつながり」これをなくしては、人は生きていくことができないだろう。家族、友達、先生、近所のおじちゃん、登校中に会う顔見知りの小学生。私は様々な人とつながっていて、つながっている人一人ひとりが、私と同じように人とのつながりを持っている。そんなことは当たり前だ。でも、だからこそ、私は人とのつながりを大切にしたいのである。

「中学校は違うけど、ずっとつながっているよ」と、「これからも友達だよ」。そんな言葉を交わして小学校の友達と別れたのは三ヶ月前の卒業式。違う中学校に進むけれど、会えばこれまでと同じように冗談を言い合いながら楽しい話ができると思っていた。

卒業式から二ヶ月後のある日。小学校で運動会があったのをきっかけに小学校には多くの卒業生が集まった。かつてのクラスメイトを見つければ「久しぶりー」、友達を見つければ「会いたかったよー」。二ヶ月ぶりの再会にワクワクしたのもつかの間、あっという間に皆スマートフォンを取り出して思い思いのことをやり始めた。私はびっくりした。皆、話したいことがあって、近況を確認したり、思い出話をしたりするのだと思っていたからだ。ところが多くの人が近況の確認も思い出話もメッセージアプリで済ませてしまっていた。だから、久しぶりに会ったところで話すことなど大してなかったのだろう。でも、私は違う。みんなと話し、お互いの近況を伝え合いたかった。メッセージアプリでつながること自体が悪いとは思わない。だが、つながっているという安心感によってかえって話す機会が少なくなってしまうのは寂しいことだと思う。メッ

ジーアプリでつながることは本当のつながりといえるのだろうか。

私はスマホを持っていない。「スマホがないとメッセージアプリも使えないから、人とつながれなくて不便だね。友達もつくりにくくない？買ってもらえばいいのに」と気遣ってくれる友達もいるが、私はそうは思わない。メッセージアプリがなくても、人とつながることはできる。むしろ、メッセージアプリを使えないからこそ生まれるつながりというものがあると思うのだ。

その一つが、私が転校する前に通っていた小学校の先生との手紙のやりとりだ。手紙はメッセージアプリと比べると気軽に便利にやりとりができるものとは言えないだろう。しかし、相手の書いた文字や便箋から、メッセージアプリにはない温かさを感じることができる。以前、進学する中学校の報告をする手紙を出したところ、その先生は私がどこに進学することになったのか気にかけてくださったことが返事の手紙から分かった。その時私はとても嬉しかった。もう二年も会っていない先生が私のことを考えてくださったとは思っていなかったのである。

これから先、様々な技術が進化し、さらに便利なツールができて、様々な人により気軽に便利につながることができるようになるかもしれない。メッセージアプリでつながることも一種の人のつながりになるだろう。そのような時代になっても、どんな手段でつながりを築くことになっても、私はやはり、人と人とのつながりというのは、相手を気遣い思いやりながら築いていくものであってほしいと思う。当たり前のように会い、話し、関わっている時はもちろん、直接会えないような状況になっても相手を思いやり、気遣う気持ちを忘れない。それが、人とのつながりを大切にすることだと私は考える。

これからは私は、人と関わりながら生きていく。その人と過ごす毎日が当たり前である時。相手と気持ちがいずれ違い、そのつながりを疑った時。大切な人と離れ離れになった時。どんな時でも、相手を思いやり、気遣う気持ちを忘れず、人とのつながりを大切にしていきたい。

奨励賞

東京都立立川国際中等教育学校 三年

金山明日香

今よりも暮らしやすい自由な社会へ

もしあなたが、話すことが出来ず、自分の足で歩くことができなくなったら、あなたの生活はどのように変化すると思いますか。私は、今まで考えたことができるようになりました。

昨年の秋、私は母と妹と近所の大学の学園祭に行きました。そこではクレープや焼きそばの模擬店、音楽サークルのライブやマジックショーなど様々な出し物が行われていました。そのなかで妹が興味を持った「車いす体験」に私も参加することにしました。私は車いすには乗った経験がなく、車いすに乗っている知り合いもいないので、あまりなじみのないものでした。

私たちは車いすに乗り、後ろから押してもらいながら大学のキャンパスをめぐりました。また、話すことができないということを再現するため、車いす体験中は一切の声を出さず、「あいいうえお表」や「はい・いいえ」などが書かれたボードでコミュニケーションをとるようになりました。車いすに乗る前は、「車いすは椅子に車輪がついただけのもの。黙って座っていればいいだけだし、いつもの生活とさほど変わらなさそうだな。」と私は思っていました。しかし、体験してみて、いつもの生活とは全く違うと感じました。その理由は主に三つあります。

一つ目は、車いすに座っていると視点が低い、ということでした。視点が低くなるのでまるで違う世界かのように見えました。また、大人はみな背が高く、車いすに座っている身としては圧迫感がありました。

二つ目は、人との距離感が違うことです。車いすに乗っていると人からちらりと視線を送られることを感じますが、話しかけられることが全くなくなりました。普通に歩いていたときには模擬店のお兄さんお姉さんが「ちよっと食べてみない？」と声をかけてくれていたのに、全くかけられなくなりました。

三つ目は話すことが出来ないことも想像以上に困難があることです。あいいうえお表で思いを伝えるのは時間がかかり、「話せばすぐに伝わるのに。」ともどかしく思いました。私が何かを伝えたいときに、伝えたい人がこちらを見てくれなければ、あいいうえお表での意思表示ができないのです。声を出せばすぐにこちらを見てもらえるのに、なんと不便なことかと痛感しました。

私はこの体験を通して、車いすを利用する人、話すことが出来ない人の気持ちをおわすかながら知ることが出来ました。この気持ちは、経験しなければ絶対に知ることが出来ませんでした。

今の社会は、身体が不自由な人には暮らしにくいところもあると思います。もっと暮らしやすくするためには、理解することが必要です。しかし、人を理解することはとても難しいことです。体験するまで私は、不自由がある人のことを、気持ちを想像したことがありませんでした。以前の私のような人が今たくなるかわかりません。想像をすることで、私たちは少し自分事として考えられるようになると思います。

私は「車いす体験」に参加して、体などに不自由がある人が暮らしやすい社会というのは、みんなが暮らしやすい社会でもあると考えるようになりました。私はこれからみんなが暮らしやすい社会を実現できるように日々気を配り、行動していきたいです。

あきる野市立東中学校 二年

川本 桜子

私は常に考える

私は数年前、家族で沖縄県に旅行した際、沖縄戦についての展示を見に行きました。美しい海を見て久しぶりの家族旅行を楽しもうと考えていた私でしたが、美しい沖縄県には忘れてはいけない過去の過去があることを知りました。

展示物の中には、戦争を体験した人たちの手によって当時の様子が描かれた何十枚もの絵がありました。私はそれらの絵を見た途端、とても胸が苦しくなりました。どの絵も赤黒くぬられた画用紙にたくさんの死体や泣き叫ぶ人々、沖縄の海に身を投げる人たちの姿が描かれていました。多くの犠牲者を出した沖縄戦が終わって七十年以上の長い年月が経っているにも関わらず、ここまでの当時の様子を細かく描けるのは、とても悲惨で苦しい思いをした当時の記憶が戦争体験者の脳裏に焼き付いて離れないからだと思われました。戦っていたのは兵士だけでなく、当時沖縄に住んでいた全ての人々だったのです。そしてそれは、私と同じ普通の生活を送る人たちでした。

沖縄戦で戦った人の中には、「ひめゆり学徒隊」と呼ばれる看護訓練を受けた女学生がいました。彼女たちの年齢は十五歳から十九歳で戦争の前までは現在の少女たちと変わらない学校生活を送っていました。やがて戦争が始まると彼女たちは、負傷兵の介護や治療の手伝いをするために、陸軍病院に動員されました。彼女たちは当初、三週間もすればまた学校に戻れると思っていました。しかし、戦争は彼女たちの想像をはるかに超え、三か月以上続くことになりました。沖縄は、本土決戦を阻止するための捨て駒になったのです。彼女たちが必死で戦った病院は、現在私たちが利用しているような病院のように設備

が整っている訳ではなく、地下に潜り壕の中にベッドを設置した簡易的なものでした。負傷兵や瀕死の兵士など、まだ生きている人間からウジ虫が湧くことなど彼女たちにはとても考えられなかったことでしょう。そんな負傷兵を見て彼女たちは何を思い、治療したのでしょいか。結局、ひめゆり学徒隊は、半数以上が亡くなりました。一緒に懸命に戦っていた友人が犠牲になったのに、自分が生き残ったことに罪悪感を抱く少女たちが多くいたそうです。私は、大切な友だちの顔を思い出し、胸が張り裂けそうでした。そして、ひめゆりの塔の前で、犠牲になった魂に祈り、心から平和の大切さを思いました。

ひめゆり学徒隊の悲劇を知った私は、戦争というとても悲惨な過去から、決して目を背けず忘れることがないよう、後世に語り継いでいく義務があると考えています。二度と同じ過ちを繰り返さないように、二度と戦争を起こさないように、二度と犠牲者を出さないように、私たちにはこれからの日本という国をつくっていく責任があると思うのです。

戦争は、多くの人を苦しめる最大の出来事です。現在ではロシアによるウクライナ侵攻により、一年以上にわたり戦争が続いています。戦争は決して過去の出来事ではありません。実際、毎日恐怖に怯える人たちの本当の気持ちをすべて理解することはとても難しいことです。それでも私は彼らを思い、一刻も早く戦争が終わることを願っています。常に死と隣り合わせにある人々のために自分は何ができるのか、私は考え続けていきたいのです。

世界のどこかで絶えず戦争や紛争が続く今、苦しんでいる人が大勢いることをどうか忘れないでください。そして私たちは歴史が教えてくれる教訓を学び、平和の大切さを語り継いでいきましょう。戦争の犠牲になり悲しみ嘆く人一人も出さないために、私たちができることを常に考えて生きていきたいと思えます。

奨励賞

東京都立武蔵高等学校附属中学校 三年

澤田 一花

ぶつかってみれば良い

「ぶつかることは怖いことではないんだよ。」

これは、小学校四年生の頃、母が私にかけてくれた言葉である。当時、友達との付き合い方について深く悩んでいた私は、この言葉に救われたといっても過言ではない。

友人関係に悩んでいたとは言っても、決していじめを受けていたという訳ではない。私の通っていた小学校は比較的平和な学校で、いじめという言葉は聞いたことがなかった。かといって、トラブルが全くなかったとは言えない。むしろ、そこかしこに転がっていた。「この子とは一緒に帰りたくない」「今日この子と遊ぶのは私だ。」「グループ活動ではこの子と一緒じゃないと嫌だ。」毎時間のように、誰か一人はこのような台詞を吐く。互いが互いの主張を通そうとする。そのため、和解除するのにも一苦労だった。当時の私は、友達と喧嘩になることを恐れるあまり、自分の意見を強く主張することも、誰と一緒に行動するかを自分で決めることもできず、いつもどっちつかずだった。今思えば、私のそんな曖昧な立ち位置も、揉め事の一因になっていたのかもしれない。しかし、自分自身のことを客観視することもままならなかった私は、次第に揉め事に関わるのが面倒になり、しまいには学校に行くこと自体が嫌になってしまった。

登校を渋る私に対して、見かねた母がかけてくれた言葉が、「ぶつかることは怖いことではないんだよ。」という言葉だった。ぶつかることは怖くない。この言葉を聞いて私は、一人一人ちがいがあがる以上、たとえ友人と喧嘩になっ

たとしても、時にはぶつかることは仕方ないことだと思えるようになった。むしろ、時にはぶつかってみることこそ、お互いを知るまたとないチャンスだと考えられるようになったのである。

それから、何か揉め事が起こった時、まずは落ち着いて相手の話を聞き、その後で冷静に自分の意見を話してみようになった。互いの考えを理解し、時には自分が譲歩し、時には相手が妥協して、より良い解決に向けて折り合いをつけていくうちに、だんだんと喧嘩や揉め事は減っていったように思う。自然と学校に向かう足取りも軽くなっていった。

もちろん、ぶつかってみても分り合えず、関係が遠のいてしまった友人もいた。けれども、それ以上に、ぶつかなければ喧嘩別れで終わってしまったかもしれない友人が沢山いる。実際にぶつかって、互いの良い所も悪い所も知ることのできた友人たちと過ごした、小学校の最後の二年間は、四年生の頃には想像もできなかった程、楽しく充実した、最高の二年間だった。

今、私の妹が、あの頃の私と同じ年齢を迎えようとしている。妹自身やその周囲に、人間関係に悩んでいる人が多いと知り、この年齢の悩みが、私に限ったものではないことを知った。友人同士の揉め事や喧嘩が原因で、学校に来られなくなってしまう生徒もいるという。そんな話を聞いて、私は妹に、自分が悩んでいた当時のことを話してみることにした。関係がこじれそうになった時はぶつかってみると良いということ、ぶつかってみても駄目だった時は、逃げたって良いということ。

世界には必ず自分の理解者がいる。それは一人かもしれないし、大勢かもしれない。大人かもしれないし、同い年の友人かもしれない。学校の中にもいるのかもしれないし、学校の外にもいるのかもしれない。真に理解し合える心の友を見つけるために、大切なことは二つある。まずは、互いの意見を伝え合うこと。それをしなければ、相手が自分の理解者となってくれるのかどうかさえ、分かるはずなのだ。そして、ぶつかることを恐れないこと。たくさん話をして、時には正面から正攻法でぶつかり合ってお互いを知ることが大切だ。辛いなら逃げたってかまわない。全員と仲良くしなければいけない訳じゃない。反りが合わない人間と離れる勇氣も必要だ。

個人差はあれども、世の中に生きる人は皆、多かれ少なかれ対人関係に悩むことがある。だから、もし昔の私のように悩んでいる人がいるのならば伝えたい。ぶつかることは、何も怖いことではないんだよ、と。

葛飾区立亀有中学校 二年

下田真愛

視野はグローバル 視点は足元

「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者も遂には滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。」

これは『平家物語』の冒頭の一節で、国語の教科書にも載っている詩です。意味を知ったとき、はかなさを感じると共に、八百年も前の詩が今もなお残っていることに驚きました。それから私は思いました。ずっと疑問に感じ、悩み続けている事から抜け出せるかもしれない、と。

私は日本の伝統芸能に興味があり、大好きです。自国の伝統を尊重し大切にするのは当然だと思っていました。それに触れるにつれて、多くの人が伝統から遠ざかっている現状を知りました。「自国のことなのになぜ遠ざかっているのだらう」と疑問を抱き続けてきましたが、祇園精舎の詩と向き合ううちに、ようやく答えが見えてきました。

私が伝統芸能が好きだという理由は、長唄三味線や日本舞踊を習っている中で、深く知るほどおもしろくなったからです。技術習得の稽古は難しく、根気と長期間の積み重ねが求められます。稽古を通じて歴史を学んだり所作を身に付けたりして、自分自身を成長させることができます。

しかし、この素晴らしい伝統楽器が、将来、ただの展示物になってしまうのではないかと不安になることがあります。実際、長唄三味線を習っていると「三味線？今時弾く人がいるんだ」とか「おもしろいの？」などの反応が返ってくるからです。「三味線って何？」という反応には、私の方が「知らないの？」

と驚きショックを受けたこともありましたが、譜面は廃盤が増え、入手できない曲が多くなっています。弾きたい曲は先生の譜面を借りるしかありません。同時に和楽器店が減少。製造やメンテナンスができる職人が引退し、後継者不足の現状があると知りました。時代の流れにより衰退していくものは「ひとへに風の前の塵に同じ」と言われているようで切なく、泣きたくなります。

現代は習い事の多様化や、ソーシャルメディアの普及、AI技術の発展など、新しいものが次々に生まれています。スマホ一台で膨大な情報に簡単にアクセスができ、次々にときめく趣味や好みを見つけることができます。対照的に、伝統に触れる機会は減っています。忙しく慌ただしい現代社会では、意識的に時間を作らない限り伝統に触れる状況はありません。一方で、日本を訪れる外国人観光客は、日本文化に強い興味を持ち、例えば屋形船や旅館などで箏や三味線の演奏を聴いたり、工芸品を手にとったりして楽しんでいきます。異国の文化に触れたいという欲求は、私たちが他国を訪れるときにも同じでしょう。

祇園精舎の詩が表すように、時は流れ変化し続けます。しかし、時を経てもこの詩が伝わってきたように、今、伝統を伝える努力がされています。古典と現代の要素を融合し、新しい形で楽しめるようにするという試みもあります。伝統を守りながら、時代に合わせてより良くしていくのいいと思います。

日々、新しいものが多く取り上げられる中で、大好きな伝統の未来に不安を感じ、私は悔しかったのだと気が付きました。「祇園精舎の詩は教訓だ」と視点を変えることで新たな希望を見出しました。人の好みを変えたり、遠ざかっているのを止めたりすることはできませんが、自分の考えは変えられません。時代の流れに乗り、ソーシャルメディアを活用し、日本だけにとどまらず、世界に向けて伝統の魅力を発信していけば良いのです。そうすれば多くの人に伝わりやすくなりますし、興味を持ってくれる人も現れるかもしれません。足元には誇り高き日本、視野はグローバルです。これからも多くの伝統文化を学び、希望を持って歩んでいきます。

高田彩夏

「無自覚の壁」

みなさんに質問したい事があります。目の前に大きな壁があったらどうしますか？ハンマーで壊しますか？諦めないで全力で登りますか？私は「言葉」で乗り越えられるのではないかと思えます。

私は生まれつき耳が聞こえません。日本手話を母語とする「ろう者」です。私たちは、聞こえる人のことを聴者（ちようしゃ）と呼びます。健聴者や健常者という言葉がありますが、健康なろう者はたくさんいます。私も健康です。聞こえないことは不健康なことではないと思うし、健聴者でも病気やケガをしている人もいます。健聴者という言葉を使っている人たちは、何とも思っていないのかも知れませんが、私はとても嫌な気持ちになります。これを、無自覚の差別「マイクロアグレッション」というのではないのでしょうか。

私がそれをはじめて体験したのは小学四年生の時に参加した工作サークルです。ペンたてを作るためにノコギリで木を切る必要がありました。私が作業台の上にあるノコギリを取ろうとすると、担当の人が「危ないよ。僕に任せてね」と言ったのです。すぐ近くでは、私と同じぐらいの年齢の子が自分でノコギリを使って木を切っていました。さらに、ハンマーを持って釘を叩こうとした瞬間、再び担当の人が来て「危ないから僕に任せて」と言ったのです。自分でやりたかった私は、思い切って「自分でやれます！」と言いました。

担当の人は、私がやろうとしている事をなぜ止めたのか分かりますか？それは、私が聞こえないからです。その時は「ああそうか。」と思ってしまいました。本当は違うのです。私は、できるということを最初から伝えるべきでした。耳

が聞こえないから何もできないというのは間違いです。耳が聞こえなくてもできます。みなさんは、泣いたり怒ったり笑ったりしていますよね。私も泣いたり怒ったり笑っています。聴者とうるう者は同じように生きています。どこが違うのか。それは社会から向けられる視線が違っているのです。

ここで、みなさんに知って欲しいことがあります。それは、ろう者の文化「ろう文化」です。例えば、聴者が声で相手呼び、声で会話をするのに対して、ろう者は相手の肩をたたいて呼び、手話で会話をします。多くの聴者はそれを知らないので、ろう者が聴者の肩をたたいたり筆談をお願いしたりすると、ちよつと嫌な顔をされることがあります。確かに、いきなり肩をたたかれて、筆談されたら驚くかもしれませんね。しかし、これがろう者の文化なのです。自分とは異なる文化を受け入れられない人もいます。だからといって相手の言葉や文化を否定するのではなく、違う言葉と違う文化があることを知ってほしいです。

無自覚の差別「マイクロアグレッション」を無くすにはどうしたら良いのでしょうか。心の傷はすぐに消えるものではありません。ずっと苦しんで今でも辛い思いをしている人たちもいます。でも「みんな」は「無自覚」なので、傷ついた人がいることにも気づいてないのだと思います。まずは、それに気づいてもらわなければなりません。そのためには、「私たち」は自分もいつかマイクロアグレッションをする可能性があることを自覚し、さらに、マイクロアグレッションに気づいたら、勇気を持って相手に伝えなければなりません。その勇気は、自分の壁を乗り越えるだけではありません。マイクロアグレッションに気づく人が増えれば、新たに傷つく人を減らすことにつながるのではないかと考えるからです。

私は、障がい者とか聴者とかろう者ではなく一人の人間として見てほしいのです。そして、みんな一緒に楽しくコミュニケーションできる社会を望みます。一気に社会を変えるのはもちろん難しいですが、私も社会を変える原動力の一つになって、「無自覚」に自分の「言葉」で挑んでいきます。

立正大学付属立正中学校 一年

月村 柚花

私が思う多様性

最近テレビやネットなどでよく聞く言葉の一つが「多様性」です。私は多様性がテーマのニュースや、テレビ番組などを見ると少し意味をはき違えているのではないかと思います。

例を使いながら説明していきたいと思います。一つ目はトランスジェンダーのAさんがいるとします。そしてトランスジェンダーに理解があるBさんがいるとします。さらにトランスジェンダーが理解できないCさんがいるとします。そこで、CさんがAさんのことを誹謗中傷して叩くのは違うし、CさんがBさんを誹謗中傷して叩くのも違う。では、AさんとBさんがCさんを誹謗中傷して叩くのはどうでしょう。一見、トランスジェンダーを理解できない人を中傷しているためAさんを守っているようにも見えますが、はたして本当にそうでしょうか。トランスジェンダーやLGBTQが理解できない人は悪い人なのでしょうか。多様性に理解がある人が百パーセント良い人なのでしょうか。私はそうは思いません。理解できるのも理解できないのも多様性だからです。ただ、理解できないからという理由で中傷する人はよくないことは分かります。

二つ目の例は、ADHDではない、自称ADHDのDさんと本当にADHDのEさんがいるとします。DさんはなにかとADHDのせいにしてしまっているのでしょうか。そのうえ気を付けて直すつもりがありません。ですが、Eさんは気を付けて直すつもりもあり、努力しています。でもこれを見てもみたらどちらも同じADHDで、直そうとしているEさんまで良くないレッテルをはられてしまいます。だから私はADHDやHSPなどのものをファッ

ションや自分をかざるためのアクセサリーのように使ってほしくはないと思います。この自称ADHDは最近ではファッションADHDといわれているようです。

三つ目の例は、私は女の子は〇〇じゃなきゃいけないというイメージを壊そうとしすぎてしまって、さらに多様性が分からなくなってしまう、自分の性別はどっちなんだろう？ 性別のことは答えたくないと思ってしまう人が増えたのではないかと思います。私は女の子は〇〇じゃなきゃいけないとか、男の子だから〇〇とは思わないで、例えば女の子は王子様をしてもいいし、プリンセスをしてもいいと思うし、その反対で男の子だってプリンセスをしてもいいし王子様をしてもいいと思います。でも一つ目でも話したように、それが理解できない、分からない、変だなと感じる人も、もちろん中にはいるかもしれませんが。それも一種の多様性なので、いいと思います。でもそれを理由に変だ、気持ち悪いと人を傷つけるのはよくないと思います。

私はこのような多様性を理解するのを尊重するならば、理解できない、違和感を持つ人も尊重するべきだと思います。本当に悩んでいる人がいる中で、ADHDやHSPを自分をかざるためのファッションやアクセサリーとして言うことができることや、女の子は〇〇でいるべき、男の子は〇〇であるべきというイメージを壊そうとしすぎてしまうことなどから、最近の多様性という言葉の間違って使っていると感じました。私たちがもう一度多様性について考え直してみたら、よりよい社会につながると思います。またLGBTQでもトランスジェンダーでも特別な多様性をもって生まれた人たちが、もっと生きやすい社会にながっていくと思います。

東京都立大泉高等学校附属中学校 一年

西 歌 鈴

アレルギーに希望を見いだせたら

私には乳製品と卵の強いアレルギーがあります。今でも通っているアレルギー科の先生には、アレルギーを持つ子供百人に一人いるかな？というくらい強いアレルギーです、と言われたそうです。

幼い頃は、おもちゃ屋さんで乳成分を含む化学薬が使われたシャボン玉が自分の肌に触れただけで湿疹ができたり、ピザ屋さんの前を通っただけで発熱したり、とても大変でした。しかし、今はだいぶ自分の体の管理の仕方が分かるようになりました。普段は母の作ったものを食べ、スーパのお総菜コーナーとか、乳製品の粒子がたくさんありそうな場所には近づかないとか自分でマネジメントできるように、毎日の生活は問題なく過ごせています。

ただ、集団生活を行うにあたって私のアレルギーが原因で周りの人たちに迷惑をかけてしまったり、心配をさせてしまったり、配慮してもらわなくてはならないことも多く、多様性がかかっている社会に暮らしていても、正直引け目を感じ、「なんで、アレルギー体質で生まれてしまったのだろう。」と思うことがよくありました。

しかし、去年自由研究でたまたま弟の大好きな恐竜を調べていた時に、ちょっと興味深い記事調べることができました。

その記事によると、アレルギーは「今後人間が生き残るためのカギである」ということでした。なぜなら、アレルギーを持つ人々は他者よりも免疫が高く人体に影響のない物質でも過剰に反応して症状を起こすから、活動が狭められてしまうこともあるが、アレルギーを持つ人々の高い免疫力こそが今後人間が

繁栄していくためのカギではないか、ということでした。

例えば、今後地球温暖化や地殻変動など人間が対抗することができない環境により未知の化学物質やウイルスが流行した場合も、アレルギーを持つ人々の高い免疫力が役に立つのではないかと考えられます。

また、人類が体を進化させている過程がアレルギーなのかもしれない、とのことでした。

確かに、私も、滅多に風邪をひくことはなく、母はアレルギーがあつて使える薬が少ないと幼い頃は心配していたようですが、今まで十二年間の大きな病気はもちろん、季節性のウイルス、インフルエンザさえ一度か二度しかかかったことがありません。やはり、免疫力は高いのではないかと思います。

行動が制限されたり、人に迷惑をかけてしまったり、また、アレルギー症状を起こしてしまったときはとにかく苦しくて、かゆいので、何かと大変なアレルギーです。しかし、いつかこのアレルギーが人の役に立てたらと考えると少しは気持ちが必要で、いつも誰かに支えてもらうだけでなく、いつか誰かの役に立てたいいな、と心から望みます。

最後に、日々私のアレルギーに配慮して下さいる皆さんにこの場を借りて感謝の気持ちを伝えたいです。いつも、私を支えて下さり、本当に、本当に、ありがとうございます。

港区立高陵中学校 三年

藤森 ないる

「ありのままぞ」

「ありのまま」という言葉を耳にした時に、あなたは何を思い浮かべますか？私は真っ先に、映画「アナと雪の女王」のヒット曲、「ありのままぞ」を思い浮かべます。小さい頃には誰しも吹雪の中、魔法の力で氷のお城を建てていくエルサに憧れの感情を抱いたことはあるのではないのでしょうか。魔法が使えるという人との違いを受け入れながら前へ前へと進みながら自信を持ってありのままの自分でいるエルサはとても輝いていました。

さて、みなさんはコンプレックスはありますか？背が高いこと。背が低いこと。足が遅いこと。勉強が人よりできないこと。コンプレックスは人によってバラバラで、ある意味個性という見方もできます。自分にとってはマイナスでも他の人から見るとプラスに見えるなど、コンプレックスは人によって様々な反応が見えます。

私もつい最近までコンプレックスがありました。あなたは何人？と聞かれて「日本人」と答えると不思議そうな顔をされることです。それもそのはず、わたしは日本とウガンダという国の血を半分ずつ持っているハーフだからです。最近ではハーフは差別的な言い方だとされ、「ダブル」という表現の仕方もあります。半分は日本人でも半分はウガンダ人なので、見た目は茶色い肌にかりへア。どう見ても純粋な日本人には見えませんよね。

幼少期の私は日本で生まれて育ちました。小学校に上がると周り「違う」というコンプレックスは大きくなっていききました。体育の時間のマラソンでは日本人の同級生の長い髪を束ねて揺れるツヤツヤで真っ直ぐなポニーテールを

羨ましく思い、同級生が「焼けたくない」、「○○ちゃんの肌白いねー羨ましい！」などと言っている姿を見て、肌の色の違いを意識し始めました。

そんな思春期真っ盛りの私のこころの悩みを支えてくれたのは私の母でした。母は明るく、優しい人で、「面白い」と言われるのが大好きな人でした。当時悩んでいる私を見て、毎日のように「あなたにはあなたらしさがあった、そのまま美しい」とおまじないのように言ってくれました。毎日のように唱えてくれた母のおまじないは私に自分らしくいることの美しさを教えてくれたと同時に、自分自身を大切にすることを教えてくれました。母の言葉のおかげで、ハーフでよかつたと思えるようになりました。自分のありのままの姿を好きになった時、私は初めて今まで私が悩んでいた事の小ささに気がつきました。

日本人は集団意識を持ちやすく、世界の国々の中でも社会性が低いと言われていることが多々あると思います。それは人との違いに敏感で、人と調和することを好むからです。そのせいで奥深くに潜めたその人の個性や特性が埋もれてしまうことがあります。以前私が自分に自信が持てなかった時のように同じような悩みを持った人がたくさんいると思います。そんな人達には母が私に言ってくれたように、まずは自分の好きなこと、得意なことを誇りに思うことが大切だと伝えたいです。

私の経験を通して、同年代の人にも伝えたいことは、他人と自分の違いやコンプレックスを隠すのではなく、自分の個性として受け止めることが大切です。人との違いはコンプレックスに感じ、マイナスに受け止めてしまうことがあります。それはあなたしか持つていない個性です。映画の初めでは自らの手で大切な家族を誤って傷つけてしまったり、周囲に力を隠そうと苦戦するエルサが描かれています。後半に行くにつれ、自分の個性に対して人との違いを認め合い、自信あふれるエルサの姿が描かれます。エルサのように周りの人の協力や自分自身を受け入れることでお互いの個性を尊重し合い多様性を認め合う社会を共に目指していきたいです。

葛飾区立亀有中学校 一年

鞠子紗陽

だから世界は

私の弟は絵を描くのが好きです。沢山の紙を使ってダイナミックな絵を描きます。色鉛筆やボールペンを使っていつもカラフルに仕上げています。工作も大好きな弟は、段ボールが一つでもあれば、どんなときよりも集中して作品を作っています。そんな弟は、色が見えません。

皆さんは、色覚異常を知っていますか。色覚異常とは、主に男性になると言われている、色の判別が難しい、普通の人と色が異なって見える遺伝性の障害です。

弟が色覚異常だとわかったのは、私が小学四年生の時でした。私達の叔父にあたる人が色覚異常を持っているので念のため弟も検査をしました。そのとき、弟の色覚異常が発見されました。検査の内容と結果を親から説明された際、私は実感がありませんでした。いつもカラフルな絵を描いているのに、色が見えない。結局、頭では理解できていても、心が追いつかないまま、しばらく経ちました。

ある日のこと、ご飯を食べようというとき、弟がリビングの緑色のソファを見て、

「リビングの茶色のソファ。」

と言いました。家のソファは緑だよ。そう言いかけたとき、弟が色覚異常であると感じました。ようやく、理解に心が追いついた気がしました。その瞬間、涙がとまらなくなりました。沖縄の青色の海は、北海道のラベンダー畑は、弟にどう見えていたのだろう。分きたいけど、わからない。色々な疑問が浮

かんで消え、浮かんで消えを繰り返して、パニックになりました。水を飲んで少し落ち着きましたが、その後食べたハンバーグは味がしませんでした。

そんな出来事から数週間後、母は私に言いました。

「ママの弟のけんちゃんも色覚異常なの。けんちゃんは緑色の黒板に赤い文字が書いてあると見えなかったの。色覚異常は遺伝性の障害だから、おばあちゃんに弟の色が見えないと伝えたとき、おばあちゃん、謝ったの。誰も悪くない障害って、厄介よね。」

お母さんは少し悲しそうな顔をして続けました。

「色覚異常の人は、地下鉄の運転手、パイロットにはなれないの。」

返答に少し迷い、

「色が見えないだけでできない仕事があるなんて不思議だね。」

と言うと、母はにっこりして、

「でも、ママとさやちゃんの見えている色も微妙に違うかもしれないよ。」

その母の言葉がつかかり、おばあちゃんに聞いてみると、

「デッサンは、見たありのままを描くでしょ。でも、デッサンで塗る色は微妙に違うじゃない。同じりんごなのに、赤だったりオレンジだったり。それがママの言う微妙に違うじゃないかな。」

ようやく少し、言葉の意味が分かりました。

世界はただ一つです。でも、人によって見えている世界は違います。だから世界は、人の数だけあるのです。色覚異常の人にとっても、色鮮やかな世界は色鮮やかです。

ただ、見える景色が少し違うだけ。色覚異常の人たちの色鮮やかな世界を守るために、お願いしたいことがあります。もし、板書をする際に赤色のチョークで書いてある部分だけが書けていない人がいたら、優しく教えてあげてください。デッサンで塗る色が違ったり、おかしい人がいても、からかわず、見守ってあげてください。そして何より、色覚異常の人たちを可哀想と思ったり、口に出すのは絶対にやめてください。

色覚異常は、世界に名を残す画家ゴッホ、2ch開設者のひろゆきさんも持っていると言われる障害です。ちっとも変じゃありません。

色覚異常は目に見えない障害で、ヘルプマークもつけられないため、誤解されることが多いです。もっともっと、色覚異常の理解が広がることを願っています。



十文字学園女子大学教授

富山 哲也

本年度も、多様なテーマで発表が行われ、大変質の高い大会になりました。まず、本日発表された主張について、発表順に簡単に講評を述べさせていただきます。

岡田悦子さんの「国際親善委員会を通して見えた私」では、様々な権利が侵害されている外国の子供たちの状況を知り、自身の生き方とも関連付けて問題意識を高めていました。

坂本絢菜さんの「地域との繋がり」では、自治会の活動に参加したり企画したりした豊かな経験に基づいて、薄れつつある地域の繋がりについての危機感が表明されました。

鈴木葵さんの「今できることは、今やろう。」からは、友との別れを惜しむ気持ちを今の自分を大切に作る気持ちにつながるという、思春期らしい思索の跡が伝わってきました。

田島侑弥さんの「夏休みの宿題に作文が三つ出た中学生の主張」では、宿題に対する批判が示されるだけでなく、宿題を選択制にすべきであるという建設的な提案が、ユーモラスな文体で述べられました。

角田知佳さんの「海外移住で得た力」では、イギリスでの生活の中で英語を学んだだけでなく、自分の限界を超えて成長できたことを今後に生かしていきたいと主張していました。

中川絢心さんの「みんなって誰ですか。」では、実態不明な「みんな」という言い方に頼りがちな風潮に異を唱え、「自分」はどう考えるかを問うことが必要だと力説していました。

長島奈央さんの「誰かへ私ができること」では、アフガニスタンの子供たちのために愛用したランドセルを送る時の優しく強い思いが、丁寧な表現から明確に伝わってきました。

村松美來さんの「生きること」では、ご自身の過酷な闘病生活が振り返られ、多くの人に支えられて病を克服した経験に裏打ちされた「命を大切に」という訴えが胸に迫りました。

物井優希さんの「ゴルフボールと砂」では、自分の人生という瓶を満たす大切なものは何かと改めて考え、日々の過ごし方や家族との関わりを見直したことがよく伝わりました。

安田みとさんの「私たちの明日。」には、亡くなった友人の思いを受け継いで生きるお父様を尊敬し、自分自身も生きている幸せを大事にしていきたいという決意が表れていました。

審査の過程では様々な意見が出されましたが、ここでは題材の捉え方と発表の仕方について簡潔に述べたいと思います。

題材は、特別な体験に基づくものばかりではなく、多くの人に共通する体験、身の回りや日常生活に関するものなどがありました。特別な体験に基づく主張については、体験の説明・紹介そのものに重みがあります。その体験から得られたものや考えたことなどを、体験をしていない多くの聞き手に伝えるように語ることが重要です。一方、多くの人に共通する体験や日常生活について取り上げた主張も、聞き手に大きなインパクトを与える場合があります。それは、題材について考えることで、視野の広がりや深い思索が生まれたことが伝わってくる場合です。中川さんの主張は、正にこれに合致するものでした。

発表の仕方について、審査の中では、会場の大きさや聴衆の人数も踏まえ、全体にしっかりと行き渡る発声の仕方が不可欠であろうという意見が出されました。力のある声は、聞きやすさだけでなく内容の説得力にもつながります。一方、抑揚や強弱などの表現を付けることについては、「表現ありき」ではないという意見が多数でした。つまり、表現が内容にマッチしていることが重要であるという意見です。この点については、発表の映像を見直すなどして振り返っていただければと思います。

さて例年申し上げていることですが、今日の発表に至るまでに、ご家庭・学校で、生徒と家族の方々、先生方で様々な会話が合ったことと存じます。その会話が今日の素晴らしい主張の基盤になっているのだと思います。この会をきっかけにして、発表した生徒さん同士も知り合いになり、ますます豊かな会話の輪を広げていく機会にいただけたら幸いです。

モデル・タレント

井手上 漠

学生のみなさんが発表している姿を見ながら、私も中学三年生の時に出場した時の、あのステージからの景色と、独特な空気感を鮮明に思い出しました。

「カラフル」という題名で、個性を色に例えてカラフルな世界を作るにはどうすればよいか、男性として生まれながらもマイノリティとして生きてきた辛さや、そこで得た知見・知恵・知識を文章にして発表し、文部科学大臣賞をいただきました。七年経った今でも、その肩書は私にとつてとても大きなものです。

学生社会では、頭と心がパンクしそうなほど感情が常に動いています。それを書き殴る様に文章にする人もいれば、哲学的でその人の私生活をのぞきたくなるような、さまざまな感性に触れられる事も、弁論大会の面白さだと思っています。

今回、弁論を発表したことがみなさんの人生の糧になるかもしれない。そんな素敵な場に参加させて頂いた事を嬉しく、光栄に思います。心より感謝申し上げます。

教育研究者・ミュージカル俳優

山崎 聡一郎

この大会は「中学生の主張」と銘打たれているので、中学生らしい視点や感性から組み立てられていることが重要であり、その視点こそが大人に新しい発見や学びをもたらします。今回の入選作品も、中学生らしい等身大の視点から書かれたものが多く、胸を打たれる主張ばかりでした。一方で、その執筆の契機となった体験は、必ずしも中学生にとつて身近なものばかりではありませんでした。だからこそ、日常的な風景や気づきを扱った作品は、特に目を引きました。

何気ない日常が常に完璧ということはありませんし、何気ない変化や、見過ごしていたちょっとした不便に気づく力が、社会を良くしていく上で実はとても大切な力です。ぜひ今回の入選作品から、「論理的に主張する」とこの神髄を学びつつも、その主張の源泉となる体験は必ずしも特別である必要はないことを認識して、普段から注意深く生活をして欲しいと思います。

東京都私立中学高等学校

父母の会中央連合会副会長

中野 久美

受賞された生徒の皆さん、おめでとうございませう。

壇上で発表している姿は、とても立派でした。異文化を受け入れ多様性を尊重する姿勢、人と人との繋がり、直接言葉で伝える大切さ、自分の経験を力の糧に変えたこと、広い視野と柔軟な発想。中学生らしい身近なところから社会に繋がりが、どのようなことを感じ、どのような思いを持って過ごしているのか、皆さんの言葉から伝わってきました。

近年における国内外の情勢は様々な動きがあり、インターネット等で情報を得られる時代ですが、直接自分の目で見て、聞いたことを信じ、ご自身で判断できる力を学校生活の中で培って欲しいと思います。

皆さんの言葉が幸せな社会に繋がることと信じています。そして、皆さんの未来に向けての夢が叶いますよう心から応援しています。

東京都公立中学校PTA協議会会長

関口 哲也

込み上げる皆さんの思いを聞かせて頂きまして、ありがとうございます。

皆さんの主張を聞いて、現代社会の様々な出来事を知り受けとめ、真剣に考えていることが理解出来ました。グローバル展開、地域社会、SDGs、環境変化等、大人社会の縮図とも言える場面に直面し、様々な経験による歓喜、感動、悲しみ、苦悩等を、中学生という視点で描かれている主張だと思いました。これらの主張を大勢の聴衆の前で発し伝えるということは、ドキドキ感もあります。が、より深く自らに刻まれ、今後の糧となる機会だったと思います。

今後の人生において、更に心動かされる場面に遭遇することがあると思います。その際には、もっと広く多角的に、深く探求心を持ち、多くの意見を聞いて、自らの思い、考えをまとめ、皆に伝えて欲しいと思います。

東京都教育庁指導部義務教育指導課長

坂本 教喜

自身の体験や経験、普段の生活で疑問に感じ考えていることなどに着目した、中学生の視点からの具体的な提案や提言でした。また、論理展開が明確であり、推敲を重ねた様子が伝わってくるものもありました。

事前に文章を受け取った際には、主張の様子を想像しながら読み進めました。大会当日、壇上で聴衆に対して堂々と述べている皆さんの姿は、私の想像を超えるものであり、感動させるものでした。具体的には、会場全体に目を送りながら自然と語りかける姿、抑揚を付けて聞き手のイメージを膨らませる話し方、話の内容に合わせてソフトに、また、力を込めてジェスチャーを交えて聞き手を引き込む工夫等がありました。

皆さんの主張からは、今の社会をよりよくしていきたい、よりよく生きていきたい願いが伝わってきます。中学生の今だから感じること、気付くことなどを大切に、様々なカタチで表現していただきたいと思います。皆さんの一層の活躍を期待しています。

東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長

村上 章

「中学生の主張」は、今回で、四十六回目を迎えることができ、今年も、五千作品を超える多くの中学生の声が届けられました。作品を応募し参加してくれた中学生の皆さん、学校関係者の皆様、ご家族の皆様など関係者の方に厚く感謝申し上げます。

作品は、家族や友達の間関係、社会課題、将来の夢など多様で、一つ一つの作品が中学生らしく素直な感性にあふれるものばかりでした。その中から、一〇名の中学生が大会に臨み、自分の言葉で、感情豊かに発表してくれました。選んだテーマに対して真正面に向き合い、主体的に考え、推敲を重ね書き上げた熱い思いであることが、発表している姿から伝わり圧倒されました。そして、東京の未来を担う若い世代に頼もしさを感じることもできました。

中学生の皆さんには、今後さらに表現力や感性を磨き、自分らしく成長してくれることを期待しています。

令和6年度「中学生の主張東京都大会」概要

- 日 時 令和6年9月8日（日曜日）午後2時から午後5時まで
- 場 所 東京都庁第一本庁舎5階 大会議場
- 主 催 東京都・独立行政法人国立青少年教育振興機構
- 次 第

開 会

1 開会

- (1) 開会あいさつ 東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長 村上 章
- (2) 審査員の紹介
- (3) 発表者の紹介

2 発表 発表者10名

— 休憩（審査）—

3 表彰式

- (1) 奨励賞受賞者賞状贈呈
- (2) 審査結果発表・講評 審査員長 富山 哲也
- (3) 賞状等贈呈
- (4) 特別審査員コメント モデル・タレント 井手上 漠
- (5) 知事賞受賞者インタビュー

閉 会

○ 審 査 員

- 《審査員長》 富山 哲也（十文字学園女子大学教育人文学部児童教育学科教授）
井手上 漠（モデル・タレント）
山崎 聡一郎（教育研究者・ミュージカル俳優）
中野 久美（東京都私立中学高等学校父母の会中央連合会副会長）
関口 哲也（東京都公立中学校PTA協議会会長）
坂本 教喜（東京都教育庁指導部義務教育指導課長）
村上 章（東京都生活文化スポーツ局若年支援担当部長）

○ 審 査 基 準

(1) 作文審査

以下のアからオまでの基準により、作文審査を行う。

- ア 中学生らしい新鮮な主張や新しい視点があるか。
- イ 個人の感想や体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
- ウ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
- エ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。
- オ 表現が適切であるか。

(2) スピーチ審査

以下のカからケまでの基準により、スピーチ審査を行う。

- カ 聴衆に共感と感動を与えているか。
- キ 説得力があるか。
- ク 熱意と迫力があるか。
- ケ 主張の内容に合った伝え方・態度であるか。

【参考】令和6年度「中学生の主張東京都大会」募集概要

1 応募資格

令和6年4月1日現在、東京都内に在住または在学の中学生及びそれに相応する学籍又は年齢の者
※国籍は問わないが、応募作品については日本語で発表できること。

2 テーマ

- (1) 社会や世界に向けての意見、未来への希望や提案など。
- (2) 家庭、学校生活、社会（地域活動）及び身の回りや友達との関わりなど。
- (3) テレビや新聞などで報道されている少年の問題行動、大人や社会の様々な出来事に対する意見や感想、提言など。

上記のような内容で、心からの思い、考えたことや感銘を受けたことなどを、少年らしい自由でユニークに、飾り気のない言葉でまとめたもの。

3 締切

令和6年7月10日（水曜日）

4 審査及び表彰

主催者において、大会の前に中学生の主張東京都大会発表者10名及び奨励賞10名を選考し、8月中旬に在籍校に結果を通知する。大会当日は発表者10名が、応募した原稿に基づいて5分程度の発表を行い、審査員の協議で知事賞（1名）、東京都教育委員会賞（2名）、優良賞（7名）を選考した後、表彰を行う。

5 その他

- (1) 知事賞受賞者を、独立行政法人国立青少年教育振興機構が主催する「第46回少年の主張全国大会～わたしの主張2024～」の出場候補者として推薦する。
- (2) 応募者全員に、参加賞として記念品を贈呈する。
- (3) 受賞作品を発表文集にまとめ、学校等へ配布する。
- (4) 受賞者の写真、氏名、学校名、学年及び作品名を、東京都のホームページと発表文集に掲載する。

応募状況

1 今年度の応募状況

(単位:人、団体)

応募者数				応募団体数
1年生	2年生	3年生	計	
535	2,165	2,766	5,466	59

2 過去の応募状況

(単位:人、団体)

年度	応募者数	応募団体数	年度	応募者数	応募団体数
昭和 54	219	-	13	797	41
55	184	-	14	562	37
56	265	37	15	736	48
57	454	40	16	1,961	60
58	142	27	17	1,552	58
59	169	39	18	2,230	84
60	230	40	19	1,919	86
61	289	58	20	2,276	79
62	509	79	21	4,105	105
63	527	80	22	3,153	98
平成元	742	102	23	1,864	77
2	326	70	24	3,316	93
3	355	67	25	3,739	72
4	472	69	26	8,446	97
5	385	36	27	9,983	95
6	280	53	28	8,620	95
7	259	48	29	7,781	70
8	230	40	30	6,878	62
9	500	58	令和元	5,784	52
10	739	45	2	6,482	65
11	491	37	3	5,932	57
12	639	42	4	5,647	39
			5	5,297	50

過去の入賞者（直近3年間）

令和3年度（第43回） 令和3年9月12日・東京都庁大会議場

賞	学 校 ・ 学 年	氏 名	作 品 名
知 事 賞	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	坂口 礼佳	兄の話
東京都教育委員会賞	あきる野市立増戸中学校・3年	奥山 朋佳	未来へつなぐ
	板橋区立志村第四中学校・3年	菊池 香帆	好きと伝えられる社会へ
優 良 賞	東京都立葛飾ろう学校・3年	大澤 美輝	差別の無い社会を
	大田区立大森第八中学校・3年	鹿島 靖媛	一人一つの命
	國學院大學久我山中学校・3年	佐藤瑛太郎	「勇気的一步」
	立川市立立川第二中学校・3年	下津浦美結	矛盾する「正しい」
	葛飾区立金町中学校・1年	住吉 拓己	2030年に向かって
	世田谷区立芦花中学校・3年	乳井 美桜	地球のためにできること
	立川市立立川第八中学校・3年	吉田 琉生	本当のバリアフリー

令和4年度（第44回） 令和4年9月11日・東京都議会議事堂都民ホール

賞	学 校 ・ 学 年	氏 名	作 品 名
知 事 賞	大田区立大森第八中学校・3年	向井 琴羽	理解のある未来を信じて
東京都教育委員会賞	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	辻谷和香奈	欲望と幸せ
	東京学芸大学附属世田谷中学校・3年	戸田 幹子	あなたのそばに
優 良 賞	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	吾妻 真希	見えない壁を越えて
	立川市立立川第二中学校・3年	片山 菜緒	壁をなくす
	國學院大學久我山中学校・3年	金子 智春	実店舗とネット通販
	東京電機大学中学校・2年	鈴木 月菜	買い物難民
	立正大学付属立正中学校・1年	ソン 楽人	キャッサバ
	中村中学校・1年	中嶋 乃菜	チャレンジド
	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	藤田 紗帆	優しさの輪

令和5年度（第45回） 令和5年9月10日・東京都議会議事堂都民ホール

賞	学 校 ・ 学 年	氏 名	作 品 名
知 事 賞	吉祥女子中学校・2年	山中 彩帆里	人生の通過点？ ～十代（adolescence）の自分とどう向き合うか～
東京都教育委員会賞	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	神村 雛子	ことは溢れる社会を目指して
	東京都立桜修館中等教育学校・3年	堤川 琉凧	防災への意識
優 良 賞	東京都立桜修館中等教育学校・3年	小林 杏珠	会話の本質
	立川市立立川第四中学校・3年	近藤 寧々	祖父から教わった農業
	葛飾区立本田中学校・1年	樋山 瑠斗	僕の将来の夢
	立川市立立川第一中学校・2年	三島 穂紀	SNSと気持ちのコントロール
	十文字中学校・1年	毛利 日鞠	「青春取扱説明書、規則改正を添えて」
	東京都立武蔵高等学校附属中学校・3年	吉川 鳴海	心を彩る年中行事
	あきる野市立増戸中学校・2年	渡邊 一太	「いじめ」と向き合う「人」と向き合う

令和6年度「中学生の主張東京都大会」 動画配信及び東京都公式ホームページについて

今年度も、中学生の皆さんから、たくさんの素晴らしい作品をお寄せいただき、ありがとうございました。応募された方々、大会に参加された方々及びご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。大会当日の様子を東京都公式動画チャンネル「東京動画」で公開しています。ぜひ発表者の皆さんのスピーチをご視聴ください。また、この文集は東京都公式ホームページからもダウンロードできます。詳細は、東京都公式ホームページをご覧ください。

【令和6年度「中学生の主張東京都大会」動画配信（令和7年10月末まで公開）】



<https://tokyodouga.metro.tokyo.lg.jp/bjpkjasoc.html>



<https://tokyodouga.metro.tokyo.lg.jp/3qqr7xk3rao.html>



<https://tokyodouga.metro.tokyo.lg.jp/dpqqq3slalu.html>

【中学生の主張東京都大会 東京都公式ホームページ】

The screenshot shows the website interface for the Bureau of Citizens, Culture and Sports. The main content area is titled "中学生の主張 東京都大会" (Middle School Students' Opinions Tokyo Metropolitan Competition). It includes a navigation menu on the left, a breadcrumb trail at the top, and a main text block with a "概要" (Summary) section. The summary lists two points: (1) Selection of 10 Tokyo Metropolitan Competition presenters and 10 award winners, and (2) The 10 presenters will give speeches at the competition on the day of the event.



https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/tomin_anzen/jakunenshien/chiiki-ikusei/ikusei-jigyuu/syucyou/index.html

受賞おめでとうございます



受賞者と審査員の皆さん



奨励賞受賞者と審査員の皆さん



発表者と審査員の皆さん

登録番号 (6) 67

令和6年11月発行

令和6年度 中学生の主張東京都大会 発表文集

編集・発行／東京都生活文化スポーツ局都民安全推進部若年支援課
〒163-8001 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号
都庁第一本庁舎北塔34階
電話 (03) 5388-3098

印刷／正和商事株式会社

〒161-0032 東京都新宿区中落合一丁目6番8号
電話 (03) 3952-2154

